

法政大学史学会通信 第八号

出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政大学史学会通信
巻	8
ページ	1-14
発行年	1965-10-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/11273

法政 大学 史学会通信

才 八 号
昭和四十年十月

目 次

- 一 焉馬魯魚の誤り（丸山忠綱）
- 二 法政の皆様へ・カンボジアにて
（木村わか子）
- 三 研究会めぐり5 法政大学史蹟愛好会
- 四 会員新著紹介『天領』（村上直著）
- 五 史学会行事
- 六 会員近業・動静
- 七 学内・研究室近況

焉馬魯魚の誤り

丸 山 忠 綱

まず文献史料によつて論をたてるのが歴史家の常道である。したがつて文献史料を正確にむことが要求される。しかしこの明白なことが実際においては決して楽ではないのである。

古来、書物の誤植については焉馬魯魚の誤りという言葉がある。すなわち焉の字と馬の字、魯の字と魚の字とは字形相似しているため往々にしてとり違えられていることがあるというのだ。

字形が似ていることによる誤りは大学生諸君の試験答案に菅原道真を菅原道具（クダハラノドウグ！）と書いているのをしばしば（決してオーバーな表現ではない）実際に見ている一例からでも、その多いのが思いやられる。共産党の国会議員として活躍した高倉テル氏もとは高倉輝と書いたのであるが、ある時もらった郵便に高倉輝（フンドシ）様とあつたのにかんがみるところあつて、テルと仮名書きに改めたといわれる。近頃、大学院の研究発表会で、史料解釈上考うべき二三のケースに遭遇した。江戸川の別名に文巻川というのと夕巻川というのがあるという。刊本資料ではそのままともにあげてあるそうである。しかし文の字と夕の字は筆記体では至極誤りやすい文字である。この川の別名も恐らく意味の通ずる文巻川が正しく、夕巻川は誤り読んで伝えたものである。

また別な発表で、姓の石川を右川としたり、石上としたりしたものがあるというのがあつたが、これも同じで

である。川を上と伝えたのは川の字と上の字の草体「ゞ」とが似ているためと考えられる。

かつて建永二年、法然及びその門下が流罪、斬罪に処せられ、恵修念仏が停止された有名な事件がある。その際、後鳥羽上皇の院の女房たちと不義をはたらいた安楽房遵西、住蓮房が「羅切」の刑にあつたと伝えた史料もある（皇帝紀抄）。男性の象徴を切り落すということの真偽はいろいろ議論をうんだ。これについて辻善之助博士は羅の字と頸の字の草体がそっくりなため、頸切Ⅱ斬罪を誤つて伝えたものであらうと指摘されている。恐らく従うべきであらう。

『御堂関白記』寛弘五年二月十日条を見よう。このあたりは道長自筆の伝えられていないところである。この日、藤原行成が源道方を使者として、明十一日の列見の儀は昨九日の花山法皇の崩御があり、いかがすべきでしようかとうかがいをたてて来た。道長はこれは太政官内部の儀式であつて天皇とは直接関係がないから自分で裁定すればよいのだが、やはり法皇との関係もあり、自分一人の判断では決しがたいとして一条天皇の決裁を仰がしめた（結局、勅命により延期となつた）。この記事中「是間中事……」とあるが、もとは「是官（すなわち太政官）」

中事……」とあつたのが伝写の間にこのように誤つたものであらう。これも官と間の草体がよく似ているからである。このことは最近、土田直鎮氏がその著の中で指摘された通りである。

また国書刊行会本『令集解』田令・置官田条に引く「古記」に屯田とあるべきを長田としている。恐らくもとには正しく屯とあつたのを長の字の草体「ゞ」と見誤つた結果このようなことになつたのであらう。ちなみに国書刊行会本系統の『定本令集解釈義』（新註皇学叢書本『令集解』と同一本）には、長（屯）田としてあり、頭註では「屯田」として説明を加えている。国史大系本は屯田とのみある。これでよいと思う。

魯魚式の誤りは古く聖徳太子の時、大陸に派遣された学問僧の一人で、後の大化改新の際の国博士、日文（ミン）が、同じ『日本書紀』の中で、別に日文（ニチモン）とも伝えられている例もある。こうなると某国會議員候補者が片山哲氏を片山折口（オリグチ）君は云々といったと伝えられる話も一概には笑えないかもしれぬ。

われわれは書物を読む場合、特にそれを引用して論をたてるような時には、よく推理を働かせてみることに、また一通りの文字の草体に関する知識をもつていることが必要であらう。

法政の皆様へ

Ⅰ アンコール・ワットの印象Ⅰ

カンボジアにて

一九六五年六月

木 村 わか子

羽田発、香港経由、ブノンベン着、その間計六時間、と簡単にジェット機上の時間が過ぎて、この地にまいりましてから、もう一年になろうとしております。

お変わりもなく毎日、例のお顔ぶれで、研究室や、教室を、かつてそうしたように、そして又、次も、新しい学問の場のために、営々とお励みになられる諸先生や、諸兄弟から、何のことかはみ出してしまいました。がそれでも何とか、この地で、この国の民族性、文化など、日々の生活を通して掘つてみたいものだとこころざしております。その一つ、アンコール・ワット、をお便りいたしましょう。

大体、カンボジアは、ベトナム・タイ・ラオスなどの国をとつてみても、騒然としている国にかこまれ、世界の矛盾の先端が集中した半島と云えるでしょう。こゝで、

この国は、小国の強味を発揮して、上手にこの中を泳いで、平和な桃源境（この二・三ヶ国を通つて、カンボジアに來られた方は皆様そう仰言られて、この国の香気さを表現されます。）を保つております。が米国の援助も断つてしまつてゐる現在、どちらかと云うと、政治・経済・文化の面で矢張りフランスに一番近くあつたし、今もあると云う以外は、少しずつ、左寄もしているのではないかしらんとみられます。とは云うものの、シヤヌーク首相がかつて四年前まで、国王であつた独裁制の強い国である、云う政治的な形だけでなく、産業・経済の面からみても、日本の明治前期・絶対王制のそれに似た様相を呈しているとお伝えすれば、どれ程生産があり、どんな生活をして、どんな物の考え方をしているか、又どの位の形で世界に伍しているかが御想像いただけることと思ひます。たゞ一つ、大きな違いは、産業ブルジョアジークの発展と云う言葉に變つて、華僑がこの点にはまり込んでおり、いろいろな重要な力を占めているし、今後、ますます発展、充實してくる中国との関連をたどつてみても、問題を多く含んだ点、これは日本のそれらと、はつきり違つたファクターの一つであらうと思ひられます。

鉄道も幹線が一本、南北に走るだけで、殆どの交通は車

を利用します。私達が住んでいるセンターから、ボタンパン（カンボジアでは首都のプノンペンに次ぐ町と云われておりますが）に出るにしても約四五軒をとばして行かねばなりません。日常生活の買物はこゝに日曜毎に出かけては用をたしています。そんな有様ですから三百軒、何処に行くにも乗りますし、人や車も、日本のように混んではおりませんから、大体、時速、平均百軒位でとばして歩きます。バスですら、直線の道は八十軒位です。この要領で、センターから百五十軒ほどあるアンコール・ワットのある町、シムーリアップの町にも、私の運転でさえ一時間半か一時間五十分位の時間で、しげしげと遊びに行かれます。

何回訪ねても、あきると云うことのない素晴らしさがあり、さすがはと思われれます。世界の七つの観光地の中の一つ、と云われるだけあつて、壮大なスケールを持つている石造の宮殿と墓所です。シムーリアップの町を抜けた後、数キロのジャングルを走抜けると急に眼前がひらけて、木造の建物の史跡を見なれた私なぞ、日本では見られない目新しさを見せて、目前にせまつてまいます。

往時、栄えた都も、エバーグリーンフォレスト（*Evergreen Forest*）地帯と云うこの国ではめ

ぐまれた水のある地帯のために、都が亡んだ後は、時と共に樹々が繁り、ジャングル地帯となつて、この石造の建物を、千年もの間、埋めていたと云われ、フランス政府の援助で開発され、ジャングルが切開かれて、立派なドライブウェイが中を美しく通つているので、この苔むした幾つもの建物は、一層素晴らしさを加えているのだらうと思われれます。落葉が散敷き、つもつている樹々の中の道を、ゆるゆると走ると、少しひらけたと思う所に建物があります。仰ぐ様な梢で、鳥が啼き、その声が森林の中を何処までもわたつて行くかと思われる程、静かです。リスが木から木をわたつているのをみかけることもあります。幾つもの蝶がヒラヒラと高く低く舞つていると、辺の静さはますます深いものゝように思われ、たまに車がふかすアクセルの音がなければ、時代を取違えるかも知れません。大体、シムーリアップの建物が、かつて宮殿であつたと云うバイヨンなぞ、四方の隅に人面の像があり、二階・三階のテラスをもつた建物の、柱と云わず壁と云わず、全部彫刻がしてあります。戦乱の様、平民の生活、魚とり、座産、チエスの遊び、いかめしい、仏像や王のプロフィールから、ほのぼのと思わず微笑をさそう町のかたすみの生活が、一こま、一こまにな

つて、素朴な表情や肢態と一緒に、克明にはりつけられています。

石は七色あつたと云われ、その産地も不明な砂岩、一つ一つのぞくたびに、人間の生活と云うものは、本質的なイミで異つた民族も、千年前も、大した変りはないものだなアと云う思いが心をかすめます。今もこゝ、そこでやつている様な姿がいくつか、この風雨にさらされた石の面にうかゞえるのは、何とも親しく、なつかしい思いをわかせられ、一つの建物だけでも、何回も行きつ戻りつして、見あきることありません。墓所、又、宮殿、何の王のもの、何の王子をかくまつた館、など点々と林の中に散在しています。これらを構築した富、権力、など、伏せられている歴史の中をのぞく一つとして、それを裏付け、うなずかずように、今もなお満々と水をたゝえる貯水池があります。この水は、百五十萬町歩の水田を潤すと云われ、高度な技術を持つてこゝを訪ねる国の人々でさえも、この堤のふちに立つと呆然として、口をつぐむ、と噂されているもので、この都市の東南に一つ、西南に一つ、整然と作られています。

智恵子の求める青い本當の空が、東北の山々の上にひろがつていると詩われていますけれども、この南の国でも、抜けるように青い空や、輝くように明るい太陽が、

この石造の壮重な建物や、高い樹の梢を、覆っています。歴史を思わせる鎌倉や平泉の樹々は、美しい空と一緒に夏と云つてさえも、時の流の哀しみを漂わせていると思われるのにひきくらべて、この遺跡や空や樹は、力強い重量感と共に、明るい輝かしさを投げかけるのは、何のせいなのでしょう。

天井には、こうもりが住み、一部崩れ、削り取られて、角の丸くなつた大きな石を眺めて立つていると、訪ねるたびに、改めて、々人間の歴史々に感動し、もう一度、小さな私を謙虚な気持で、時の流の巾に移し直させられてしまうのです。

未だいくつも、お便りにのせたいものがございますが、日本に一時帰国の出発間際で、種々さしそまつた雑用があります。それがすみ、落着きましたら、又、お便りなぞ、させて頂きます。皆様の御健康を祈ります。

さようなら。

^^ 研究会めぐり V V 5

法政大学史蹟愛好会

当会は昭和三十六年に児玉幸多先生をお迎えして郷土

史研究会として発足しました。ところが上層部の人達の意見の対立で郷土史研究会は、昭和三十七年十月、史蹟愛好会と史蹟研究会に分裂しました。この年、森克己先生を顧問として迎えし現在に到つております。

日本に於いて現在、おびただしい史蹟が存在しております。古人の文化遺産であることはいうまでもありません。しかし、これらはともすれば、資本主義経済のもとでは、近代化という名目で破壊されがちです。当会は、これらを憂慮して、史蹟を恒久的に維持することを究極な目的として、且つ又これらを愛好する精神を函養するものです。

現在の活動内容は、毎年春の総会で統一テーマを決定し、これに従つて史蹟を政治・文化・社会・経済等の多方面から研究しその足跡を記する為、年一回の機関誌を、時に応じて会報等を発行しています。最近の統一テーマは、三十七年「郷土の史蹟」、三十八年「禅」、三十九年「城郭」、そして今年度は「古都（京都・奈良）」です。これらの研究方法として、週三回の学習会を行つており、これはテキストを使用しますが、あくまでも参考程度にとどめ、テキストの説にこだわることなく他説等をひきだして、レポーターを中心に討論する、いわゆるゼミナール形式をとっております。又月一回、統一テ

マにこだわることなしに史蹟巡りを行い報告書を提出する。さらに春夏の合宿、初夏のサブ合宿を行い、秋の大祭には、その真価を内外の人達に問う。なお卒業された先輩で構成された朋友会もあり、何かと当会に援助を与えてくれます。

顧問 森克己先生、オ一学生課長・川又欣一郎氏
会員五十八名 代表 新田完三（法三）、以下史学科のみ示す。

岡田正広（三）、篠田かつ子（三）、鎌田友子（一）（岡田記）

△ 会員新著紹介▽

村上直著 『天領』

多くの矛盾を内にもち、動揺しつつも約三世にわたつて存在した幕藩体制は、多くの研究課題の対象となり得る諸問題を内包している。或いは中世との関連で、或いは日本の近代化との関連という視点で、また、権力構造・社会構造・生産構造という角度から等々、多くの分析視角からの労作が学界にぎわしている。

この様な日本の近世史のプロパーで、年来精力的に、幕領と代官に関する業績を次々に発表された著者が、本

書のはしがきにおいて「江戸幕府の性格は、いちじるしく強化された権力構造の特質のなかに求められるのであるが、そのなかでとくに注目されるのは戦国大名や織豊政権にはみられなかつた、広大な天領が存在したこと」に着目し、「藩政史研究完結のため」にも、天領研究の一手懸りとして、集大成されたといわれている。

本書は前・後篇から構成され、前篇では、天領行政の実態を、全国的に代官・陣屋・年貢の観点から整理し、後篇では、各地の代官を取り上げ、そこで展開された事件を中心に天領の実態を紹介されている。文中に図版は勿論、写真（陣屋・文書等）、図表、地図などが豊富に用いられ、また各項目毎に参考文献が列挙されており、本書によつて一歩深く究明するよきみちしるべとなつてゐる。さらに巻末にある索引につづいて、「天領の分布および支配高（天保九年）」、「同」（文久三年）が収録されているのは非常に便利である。

以上は本書の概要であるが、著者もいわれている様に天領支配の究明は重要な問題であるにもかゝらず、それが流動的な実態である為に、その実態把握は頗る困難である。その問題を全国的な規模で、足と頭脳を共に駆使して集大成された努力は高く評価されなければならない。代官支配の問題などは、地域によつては相当の研究

成果もあがつているが、又一方においては全く究明されていない地域もある。この様な研究成果のアンバランスを、一定のレベルで、全国的に通観するという本書のねらいは充分に果されていると思う。いわば幕藩体制史究明の重要な一支柱がたてられた意義を果したものであり、今後学界で益する所大なるものがあると思う。

換言すれば、本書は天領研究辞典・代官研究辞典としての機能を十分に備えたものといえるし、日本の近世地方史研究者必携の書ということが出来よう。そして今後農村の側からみた天領、という観点からの多くの業績が生み出されるならば、天領研究の一歩前進が果されたことになるであらう。この様な天領研究の発展に大きな推進の役割を果すことも期待できるのも本書である。

なお著者は、さきに『代官―幕府を支えた人々』（人物往来社刊）を発表し、本学史学科旧制二回の卒業生であることを附記しておく。（芥川竜男）

判 本文四七〇頁 定価一五〇〇円）
（人物往来社 昭和四〇・五・一五初版発行 四・六

※前篇目次―一 天領の規模と変遷、二 天領の支配と代官
三代官陣屋の構築 四 幕府の天領支配の方針 五 天領
の年貢と城米 六 代官の任命と赴任 七 代官の民政と
職務 八 代官の経費と修理
※後篇内容―一 関東代官・関東郡代、出羽・陸奥・越後・
信濃・伊豆・駿河・遠江・三河・美濃・飛騨・
近江・畿内・丹波・生野・石見・備中・美作・伊予・
長崎・天草各代官、西国郡代

史学会行事

○四十年年度総会・新入会員歓迎会

昭和四十年六月十二日（土）三時～五時四〇分

於八三四番教室

本年度総会は学部三年三本菅委員の司会で開会された。議事に先だち、会長岩生成一先生から御挨拶があり、ついで、先例により丹治助手が卒業生・在学生委員の横顔を紹介、大学院修二の森睦彦君を議長に選出、議事に入った。

先ず、実習校から車で馳せつけた松井秀順委員からプリントを中心に活動報告があつて、例会委員会や当面する問題について真摯な意見を交換、会計報告は松尾委員が担当、決算報告、予算審議を経て議事を終了した。

引続いて恒例の歓迎会に移り、在学生は高橋清子委員、卒業生は那須良郎委員が、なごやかに、そして力強く歓迎の言葉を述べた。会は大橋委員の名司会によりスピーディに進行、諸先生方から示唆に富んだお話を拝聴、さらに参会者全員が次々に立つてユーモラスに自己紹介をして時間不足を惜しみつゝ五時四〇分散会した。

※当日史

※当日史学会通信才七号を配布。

出席者総数 五八名

○例会（四十年年度才一回）

昭和四十年六月二十九日（火）六時 五二二番教室

A 卒業論文発表（内容紹介と作成経験談）

①「才二次長州征伐に関する一考察」

修一 森田 稔

②「享保改革期殖産興業政策の一考察」

修一 木村 英樹

それぞれ目次プリント配布、①は岩生教授 ②は安岡講師の講評があつた。

B『法政史学』才十七号掲載論文の紹介批判

「明治前半期における井上馨の東亜外交政略」（安岡昭男）

当日予定の新井揆博氏が病気のため、代つて那須良郎委員が担当。執筆者からも批判に対する応答があつた。（司会安達備委員、八時終了）

〔出席者〕右以外に竹内・河原・丸山各教授、丹治助手。石塚栄委員、矢口五郎・欄木寿男・鈴木和子・森睦彦・安野真幸、四年16名、三年7名、二年8名。

○春季史蹟見学 北 鎌 倉

昭和四十年六月六日(日) 雨

東京駅十三番線ホーム9時集合9時27分発、北鎌倉駅10時20分

〔円覚寺〕先ず駅すぐそばの円覚寺を見学。同寺はいりまでもなく鎌倉五山の才二位、臨済宗円覚寺派の大本山で開山は仏光禪師(祖元)、開基は北条時宗になる。弘安五(一二八二年)年建立された。総門、山門を通り仏殿を見学し、同寺境内の最奥にある舍利殿に向つた。舍利殿の建立年代は不明であるが、その様式手法上明らかに鎌倉時代とされている。ここは禅僧の修練場であるため、静肅に見学しなければならなかつた。舍利殿の外観は入母屋造のために壮嚴というよりは重苦しいというような感じであるが、内に入つてみると天井が高く外観とはうつつて變つて広々としている感じであつた。丹治助手および芥川竜男氏より禅刹様式についての説明があつた。その後、境内をもどり仏殿の前で丹治助手より円覚寺の説明があつた。

〔東慶寺〕次の東慶寺は寺の都合で見学出来なかつた。丸山先生より東慶寺内に関する川柳の紹介があつた。建長寺に向つた。

〔建長寺〕 建長寺は臨済宗建長寺派の大本山で、鎌

倉五山の才一。開山蘭溪道隆。開基北条時頼。建長四年建立(一二五二)。国道より総門へ通ずる道は雨のため非常に歩きにくかつた。総門・山門・仏殿を通り、方丈で昼食。先生方を囲み談話の時を過す。岩生先生が、歴史を学んだ動機について話されたが、この話は参加者全員に深い感動をひきおこさしめた。その後、参加者全員の自己紹介。しかし岩生先生のお話の影響で皆口ごもりがちのようであつた。丹治助手より建長寺についての説明。外は依然雨である。その後八幡宮に向つたが雨が強くふり八幡宮は見学せず、国宝館に廻つた。

〔国宝館〕 国宝館の建物は正倉院の校倉造に擬した鉄筋コンクリート建築である。陳列品は彫刻、絵画、工芸品、古文書等であるが、特に仏教美術に関するものが多い。雨がこふりになるのを待ち国宝館を背景にして記念撮影。ここで解散した。(三時)

岩生、河原、丸山、安岡、丹治先生始め、参加者五十三名。雨にもかかわらず多数参加していただいた。但し、竹内先生が都合により欠席されたのは残念であつた。解散後、丹治先生、芥川竜男氏をはじめとして二次会を開いた。在学生が多数参加し、楽しく過した。

(三年 三本菅正夫)

△参加者内訳▽卒・院 芥川竜男・新井探博・安達清・
向井晃・奥山英男・森睦彦・木村英樹・笠原嘉子・河野
勝・片野浩、通教 坂本昭子・山口清・赤津豊子・堀田
トヨ、四年5名 三年19名 二年8名(署名分)

会 員 近 業

博二 大 森 実
三枝博音の日本科学・技術史研究―主としてその方法
について―(科学史研究七四号 昭40・8)

通教卒 上 原 邦 一

卓堂立川雲平の生涯―佐久地方自由民権運動との關係を
中心として―(一)(二)(信濃十七卷五、六号 昭40・56)

長野県佐久地方自由民権運動覚書(信濃十五卷十二号
昭38・12)

松本契匡社の一側面(社会科研究三号 昭39・9)

郡立北佐久小学校の横顔(長野五号)長野郷土史研究会
機関誌 昭)

一三〇年三月卒、北佐久郡・御代田中学校教諭―

通教・院三卒 前 川 明 久

日本古代氏姓制の形成過程(歴史学研究二九八号 昭
40・3)

5・6世紀の氏姓制と部民制(歴史学研究三〇四号 昭
40・9)―歴史学研究会一九六五年度大会才二日(五月
十七日、於立教大学)報告論題

院五 松 尾 章 一

才一回近代史サマー・セミナー(近代日本思想史研究会
・明治史研究会主催、歴史学研究会後援 八月三〇日―
九月一日、於飯能市・国民宿舎「覧山荘」)で、才一日
に色川大吉著『明治精神史』をとりあげ、「思想史の課
題と方法」と題して報告。

旧二 村 上 直

落ちた春秋・武田信吉(人物往来十卷七号・特集「徳川
家康その十六人の子供」昭40・7)

四回 堀 切 康 司氏

豊島区中学校教育研究会国語部委員として「豊島の文学」
研究集録才一集(一九六四年度)文学遺跡をを作成。

(B5判タイプ印書約百ページ 写真11葉)

会 員 動 静

*村上 直 氏(旧二)

四月から駒沢女子短期大学専任講師に就任された。
五月には別項紹介の通り『天領』を上梓。今夏は甲信

越方面へ旅行、佐渡金山の旧坑に住時を偲び、幕府直轄領の研究にフアイトをもやされている。

* 黒崎菊江さん (新一・院二)

全国地理教育研究会の団体欧州旅行に参加八月一日羽田発、イギリス・ベルギー・フランス・イタリア・スイス・オーストリア・ドイツ・ルクセンブルグ・オランダ各国をめぐり同二十五日帰国された。

* 新藤東洋男氏 (六回)

この三月奄美群島南端の与論島に渡つての調査成果に基づいて、三池山中腹普光寺に籠つて数百枚書き上げ、七月『三井鉾山と与論島』(副題「資本主義体制下における人的差別との闘い」)として発行された。

(A5判、タイプ164ページ) 附論に大正デモクラシー期大牟田市案の教育も扱われている。

来来年三月まで大牟田市立教育研究所で研修される。

* 木村わか子さん (六回・院六)

カンボジアの農業技術センターに夫君を残して、約一年ぶりに七月初め帰国され、愛児博君を幼稚園に通わされている。別項の便りは帰国直前のもの。

〔通教新入会員〕

昭和四十年十月十五日現在

氏名 住 所 勤務先

佐藤徳光

大西常雄

伊藤 朗

沼田文夫

伊藤信春

甲斐 寿

〔退会〕

小高和子

〔勤務先変更〕

田野倉進

川辺光夫

飛岡 久

山根慎太郎

坂本 昭子

四 八王子市立由井才三小学校・教頭

三 大田区立中富小学校

北海道上川郡清水町立
熊才二中学校

十五 朋来鉄工所(就職)

通教卒 聖心女子大学図書館

◇ 学 内 近 況

▽谷川総長の辞任

職員の後援会費使い込み事件の責を負つて谷川徹三総長は八月に辞任、小田切秀雄理事が総長代行をつとめ、同じく辞任した中村哲・~~檜野~~榎野晴夫両理事の補選で、大島清（経済学部長）・中島正（社会学部）両教授が新理事に選ばれた。校友代表の理事一名が選ばれてから後任総長が決められる。補選には一部学生がハンストで反対。

▽パリ大学学長の来校

国際大学協会総会参加のパリ大学ジャン・ロシエ学長は九月十四日来学、ボアソナード博士の胸像に花輪を捧げた。

研究室より

○受贈図書・雑誌

『史林』旧号三十八冊 岩生先生から研究室に寄贈して下さった。(33巻から42巻の間、欠号若干を含む)

※45巻以降史研購入揃い)

『日本の歴史』7 鎌倉幕府 (石井進著・中央公論社刊

・昭40) 四年松井秀順君

『天領』(村上直著、人物往来社刊・昭40) 発行所より。

(別項会員新著紹介参照)

『三冊神社と常泉寺の石碑』才一集 昭39 (法政大学

史跡研究会)

○購入図書：：▽『史料綜覧』巻七―巻十(東京大

学出版会) ▽『新訂増補国史大系』続刊分(吉川弘

文館) 書名略す ▽『長崎県史』史料編一・二・四(

吉川弘文館) 昭38―昭40 ▽『岐阜県史』史料編近世

一 昭40 ▽『遠山・安達』近代日本政治史必携』(岩

波書店) 昭36 ▽『郷土資料目録総覧』日本図書館協

会 昭40 ▽『中世法制史料集』才三巻武家家法(岩波)

昭和40 ▽『国書総目録』才三巻けいさ(岩波) 昭40

○雑報

※六月から毎土曜日(五時半―七時半) 近世文書講読

会が学生有志によつて続けられています。(於八六八

教室)

※「法政中学」第十八号は巻頭に周藤吉之先生の論稿

をいたゞき、ほかに大学院・卒業生・通教の論文計

十篇を収め、四十一年一月に発行の予定です。

△前号正誤▽

12 ページ上段3行目 江本嘉誠北海道網走郡

↓紋別郡

6 ページ上段8行目 上可倉→上可倉

下段平等院本堂平面図は柱その他の表示が脱

落していたことお詫びします。

〔編集後記〕

※丸山先生の玉稿、いつもながら具体例に即して、学

習上にも啓発される点が多々含まれています。

※木村さんから待望のカンボジア便り。六号留学。旅

行記の今村さん(同期卒)といひ、夏季欧州旅行の

黒崎さん(勳導欄)、三年生の井川幸子さん(法政

欧州見学団)といひ、女性の海外渡航さかんです。

○史学会委員会記事

昭和四十年十月二日(土) 二時半—五時半

於二〇四号室

秋期諸行事について(大会・懇親会・史蹟見学)

次の通り決定

十月二十三日(土) 大会 一時半—五時半

於八七七教室

懇親会六時—於日本出版クラブ

(新宿区袋町)

十月二十四日(日)

(史蹟見学、足利学校と鐵阿寺
(八時二十分東武浅草駅集合)

〔出席〕岩生・竹内・丸山・河原各教授、安岡講師、

丹治助手、芥川龍男・石塚栄・安達満・越川薫一。

学生委員四年4名、三年4名、二年4名。

※二年生委員は都合により後藤和恵さんから関本美知
さんに代った。

史学会十五年史資料(3)

○法政大学史学会大会

年度

654321回
三三三三三三
九八七六五四

393837363534 年月日

111010101010月日

1412 614 810

八八五五五
七六四四四
七七一二一 会場

発表者数

9775810

人

第七回 法政大学史学会大会

期日 昭和四十年十月二十三日(土)

時間 午後一時三〇分より午後五時三〇分まで

会場 法政大学 八七七番教室(五十八年館
七階)

一、研究発表

1. 所謂金春秋の来朝記事について 三池賢一

2. 阿蘭陀風説書の下限について 片桐一男

3. 近世宿願間屋制の確立過程について 丹治健蔵

1、2、3の事例を中心として

4. 和辻哲郎『鎖国』における合理的思惟 安野真幸

5. 天保改革と洋学書の出版 1 特に医学館 の存在について

との関係 1 森 睦彦

6. 明治初期の私学教育 1 東京府の場合 1 青木光行

7. 自由民権期における共和制思想 松尾章一

8. 大正期・株小作制の構造について 那須良郎

9. 1 島根県山間部地方の場合 1 歴史教育

現行教科書検定制下における 問題点 寺沢 茂

1、懇親 会 会長 岩生成一

一、懇親 会 (夕食) 午後六時—八時三〇分

於日本出版クラブ

法政大学史学会通信 第七号
昭和四十年十月二十三日発行

法政大学史学会